

随想 (Essay)

## 回想：エピソードが語る実践研究の回想Ⅱ

——学校からサイバー空間へと広がる学びの空間づくりと長崎・ニューヨークの体験——

**Reminiscence: Episode talks about practical research II:  
Creating a learning space that extends from school to  
cyberspace and Experience in Nagasaki & New York**

宇土 泰寛\*  
Uto, Yasuhiro\*

キーワード：実践研究，学びの空間，サイバー空間，郷土長崎，ニューヨーク

Key words : practical research, learning space, cyberspace, local, New York

### はじめに

人類は、様々な感染症と出会いながら歴史を創ってきた。定年退職し、非常勤講師として大学の授業を始めることになったが、その第1回目の授業が、『世界の感染症の歴史』（総合的な学習の時間の指導法）であり、『新型コロナウイルスとグローバル化』（社会）であった。この世界的パンデミックの事態で、社会科や総合的な学習の時間であれば、社会で引き起こされている事態に対して、避けて通れない内容であると考え、しかも、授業がオンライン方式になり、Google Classroom と Zoom 授業で実施した。もし退職し、授業も引き受けていなければ、すべて従来の授業方法で終了し、大学の姿を旧来の形で語ることになったはずである。しかし、事態は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の広がりの中で、大学の授業の姿も一変したのである。

この事態に際し、ウイルス感染者の広がりや死亡者の増大には圧倒され、悲観的な想いで、グローバル化の負の側面を語ることになった。ただ、授業方法としてオンラインに対応することには困惑することはなかった。むしろ「やっとこの時代が来たか」の思いであった。それは、日本、フランス、ブルキナファソとの大陸間教育の実践をこの10年間継続してきたが、常に課題になったのが、国を越えた教育交流や多国間での会議の開催であった。そのために、スカイプなど様々な試みをしてきたが、十分満足のいく方法までは至らなかったのである。しかし、この10年間のICT技術の発展はすさまじいものがあり、専門家でもない私でも容易に会議や交流を行うのを可能なものにしてくれたのである。ちょうどその時、このコロナ禍が世界的規模で起きたのである。むしろこの事態で、デジタル化への遅れが顕著であった日本において、ICT技術の社会への広がりや急加速せざるを得なくなったと言える。そして、そこで引き起こされたのは、学びの空間の変革である。大学の教室に来なくても授業が可能になり、それどころか、国境を越えて、大陸間でも可能になったのである。

学びの空間が、このように明確に課題として浮かび上がったのは、以前から、国際理解教育の変遷の中で、1980年から1990年代の教育内容の国際化と変革、1990年代後半から2000年代の教育方法の国際化と変革、そして、3つ目のステージに来るのが教育空間のグローバル化と変革であると認識し、大陸間教育の研究と実践を行ってきた。

しかし、事態はそれどころではなく、新型コロナウイルスの世界的な規模での拡大とパンデミックの事態は、ペストによってヨーロッパ社会が一変した歴史が示すように、大きな社会変革が引き起こされるであろう。そこでは、地球・大陸・国家・地域・家庭・個人のあらゆるレベルで、持続不可能な社会的崩壊が引き起こされる可能性もある。この事態の中で、再び学びの世界を構築していくことが真に求められると考えるのである。

このマクロな地球規模での社会変革の事態に対して、ミクロなエスノグラフィーの視点から、自分史を振り返りながら、転換点に結び付くエピソードを綴ってみたい。

第1の転換点は、郷土の地域に根差した共同体的な教育風景から、東京の近代的な教育風景への移動である。第2の転換点は、日本の教育風景と対照的な欧米の教育風景との出会いである。第3の転換点が、アフリカの支援交流から生まれた大陸間教育の風景である。

そして、これらの転換点は、この新型コロナウイルスのパンデミックによる変革に対して、何が可能であるか、模索することが自らに問われていると思う。この大きな変革のうねりを引き起こしているコロナの事態に対して、再度、自らの原点から回想し、新たな事態への対応としての学びの空間を探ってみたい。そこで、この回想Ⅱでは、「学びの空間づくり」へ着目しながら、変革の背景になった風景や体験を、振り返ってみたいと思う。

## 1. 学校と地域の関係性を問う郷土での体験

現在、学校と地域との関係については、「社会に開かれた教育課程」などそのつながりが強調されている。しかし、地域にあった素朴ではあるが豊かな教育的要素が学校だけの特性として取り込まれ、地域の子どもの生み出す世界を消失させていったのではないか。地域には地域の独自の教育的営みもあったが、現在では、塾やおけいごとの教室など、学校的営みと同じものになっている。それどころか学校の競争的な分断化を促進する営みになっている。

私にとって、第1の転換点は、郷土から東京への移動によって見えてきた学校だけでなく地域が持っていた教育的要素の喪失である。幼少期から高校までを、長崎県島原半島の郷土で過ごしたが、その生活を回想してみると、現在、総合的な学習の時間や生活科、社会科などでやろうとすることを子どもたち自身が、主体的な創意工夫の中で行っていたのである。

## (1) 地域の中の子どもの遊び場空間と実社会としての生活空間

学校から帰った後、子どもたちが自然に集まり、遊んでいる場所があった。郷土の原風景は、目の前に有明海が広がり、背後に広いすそ野を持つ雲仙岳があり、農業と漁業を営んでいる町であった。海に面した坂の下は漁業関係者の家、坂の上は農業関係者の家があり、それぞれの集落となっていた。

子どもたちの自然に集まる場所は、一つは農家の広い庭であり、狭いながらもいろいろな遊びができる空間でもあった。もう一つは、線路沿いの大きな木である。その木によく登り、列車を見ながら、壮大な雲仙岳を眺めていた。蒸気機関車が走るのを見た最後の世代とも言える。

もう一つは、砂浜である。有明海は干満の差がたいへん大きく引いた後には広い砂浜が広がるのである。夏は、もちろん波止場であり、親の許可なしでも、自分たちで泳いでいた。

この季節に応じた場所で、学校とは別の空間があった。これは、公園でもなく、子ども用の場所でもない。大人たちが、日々の生産に関わる場所であった。農家の牛が突然小屋から逃げ出し、子どもたちの遊んでいる場所に飛び出してきて、逃げ回ったこともあった。漁業の家族には今ではブランド品になった有明のりを天日に干す作業があり、これが終わらないと子どもたちは遊べないので、私も含めて漁業の家でない子どもたちも、自分の背よりも高いのり干し台を持って、並べる手伝いをしたのである。そのわきの広場が野球の遊び場になったのである。

このように、子どもの日常世界は、学校だけで終わるものではなく、地域の中に独自にあり、全てが学校社会で賄われるという発想を持つことなく、子ども時代を過ごしたのである。

## (2) 地域の中の行事を通した異年齢集団での活動

学校の中の学級は、古くは産業革命の時期に作られ、欧米では同じ学力を重視し、日本では同じ年齢を重視して作られた。しかし、地域の活動は、年齢は多様で、弟、妹などを連れてくる子も多いので、自然と異年齢集団となり、年上の人を見習いながら、地域の活動を行っていた。

中でも、小正月の「おんのほけ」は、子どもたちの重要な役割で、たくさんの木々やお正月のお供え物を集め、それを山のように積み上げ、夜になると火をつけ、一斉に燃やすのである。一般的には「どんど焼き」と呼ばれている火祭りである。これらは、まさに「正統的周辺参加」とも言え、子どもたちの学びの場であり、この伝統は引き継がれていったのである。

また、学校の運動会もフィナーレは、大盛り上がる地区対抗のリレーで、各地区とも、学校から帰った後、空き地などを利用して、子どもたちが自分たちで練習をするのである。

このように、子どもたちは、地域の風土や特色を生かして、様々な行事や活動を継

続し生み出していった。そこには教師や地域の大人もいない。年上のお兄さん、お姉さんと一緒に学び合うのである。川を上流まで探検したり、ため池の魚や野鳥などを観察したりしていた。砂浜では上流と下流に分かれて、ダムをつくり、一斉に放流して、下のダムが持ちこたえるか壊れるかの競争をしたり、冬になると北風を利用して、自分たちで大きな凧をつくり、凧あげをやったりした。

### (3) 東京の小学校での教育実践と郷土の学びの復権

確かに、私の郷土での体験では、山や川や海、その風土に密着して暮らす人々の姿があったからできたと言われるかもしれない。東京にはないのだから、できないと言われればその通りかもしれない。本当にそうだろうか。

私は、自らの実践を常に空間を意識して作ってきたように思う。学びの場の空間であり、学びの対象の空間であり、学びの方法の空間である。

実は、東京には、私の郷土になかった整備された公園があり、用水路や様々な交通機関、いろいろな種類の建物や工場、商店街などもあり、この地域の風景をなしていた。

私が赴任した東京の下町の学校は、京浜工業地帯の中小工場の多いエリアで、道路も工場の油でまみれ、緑の木々はほとんどない場所であった。そのような場所で、野鳥たちが一生懸命餌を求めて飛び回っているのである。子どもたちと一緒に数少ない樹木がある公園に行って偵察したり、砂ぼこりの舞う空き地を砂漠に見立てたり、川の汚れを記録したりしたのである。

生活科では、その誕生において、子どもたちの自然体験などがないので、それを補うために生活科が生まれたとも言われている。確かにそうかもしれないが、教師の発想や見方によって、また、子どもたちの想像力によって、様々なことが可能になるのである。人間には、イマジネーションの力があり、それを最大限引きだしながら、学びの対象と関わるのである。

野鳥観察をした1年生の学級では、子どもたちの提案で、給食に出たあまりのみかんを公園の木にさして、野鳥観察を続行したのである。まるで、私の郷土でのため池の探検と同じである。

学校と地域の関係が再び重視される今、学校の論理に巻き込まれてしまう地域の活動ではなく、異年齢の子どもたちの持つ力を信じ、子どもたちの主体的な活動を促すことが重要と考える。

## 2. 学びの空間づくりの背景としてのニューヨークでの体験

1984年（昭和59年）4月から1987年（昭和62年）3月まで、ニューヨーク日本学校（The Japanese school of New York）に派遣され、勤務することになった。この体験は、日本の学校や社会の同化傾向の強さを実感する第2の転換点となった。さらに、

その同化傾向から多文化主義への具体的な方法や実際の人々や街の姿を体験したエピソードを語ってみたい。

### (1) 子育てについての驚きの違いから学ぶ判断留保の原則

ニューヨーク日本学校は、現在のコネチカット州に移る前、マンハッタン島の隣のロングアイランドのクイーンズ (Queens) にあった。私は、学校の近くのフレッシュ・メドーズ (Fresh Meadows) の住宅地に住んでいた。ここには、銀行もデパートもあり、便利であった。環境も、たいへんよく、緑に包まれた住宅地で、Google map やストリートビューで検索してみると、デパートなどは店名は変わっているが、30年前とあまり変わっていない。部屋の中から木に登っているリスが見えたりする場所であった。ここの住居配置はゆとりがあり、日当たりもよかった。この住居の1階に住んだが、隣がフランス系のヒルダお婆さん、奥の隣がイタリア系のカニーさんである。ヒルダお婆さんの家にお邪魔して、日当たりの話になった時、日本では南側の日当たりが良い方がいいとなっている。しかし、ヒルダお婆さんは、当然のように、北側の方がベストであると言うのである。確かに、薄暗い部屋で、夜も、日本のように天井に電気がついておらず、電気スタンドである。

ニューヨークで生まれた赤ちゃんをベッドに、あおむけに寝かせていると、本気になって、「どうしてこんな危ない寝かせ方をするの」と言うのである。日本の私達からすると、うつぶせの方がよほど危ない気がすると思える。もちろんベッドとお布団の違いやマットの硬さの違いなどその背景にはいろいろとあることが分かった。

また、赤ちゃんが泣いていると日本の母親はおむつを見たり、おなかがすいたのではないかと赤ちゃんのそばに寄り添ったり、様々なケアをする。ところが、ニューヨークでは、どうして母親が赤ちゃんの所にすぐに行くのかと言うのである。赤ちゃんは、泣いているのではなく、コミュニケーションをしていると言うのである。確かに、赤ちゃんの時から個室があるのに対して、親子で川の字になって寝る日本の文化や住環境の違いもある。

異文化間での判断は、その文化や社会の慣習によって判断することが多いので、一度判断を留保し、この判断は日本の文化の中の判断ではないかと振り返ることが重要だと学んだ。

### (2) ニューヨーク市のコミュニティの中の公園

この住宅地の小さな空き地や公園に、設置されているものがあつた。それは、1本のバスケットゴールとテニスの壁打ちができるコンクリートの塀である。もちろん日本の公園にも、テニスコートやバスケットコートはある。しかし、テニスをする仲間と一緒にコートに行き、練習やゲームをするのである。一人でテニスコートに行っても、見るだけである。このニューヨークのテニスの壁打ちはよく一人でも行った。一人でやっても何もおかしくない。一人でやっていると、他の人も来てやるので、

二人でいっしょにやることもあれば、半分に分けながらやることもある。そこには、必ずコミュニケーションが生まれるのである。

これは、多様な人々が住む街にとって、人々を同じ趣味やスポーツでつなぐしかけとも言える。日本に帰国して、一人でできる壁打ちの施設を探してみたがあまり設けられていないのが実情であった。

一人からいられる場所の大切さである。必ずそこからつながりができるしかけの重要さである。

### (3) ニューヨーク市立大学 英語コースでの体験

ニューヨーク日本学校に在職中に、多くのアメリカの現地校や外国人移住者の多い地域をまわり、多国籍、多言語、多文化の状況は、今後の日本でも起こることを感じた。そのために、ニューヨーク市立大学の International English Language Institute に入学し、多くの移民の人々と共に英語を学んだのである。夜間や土曜日に講義が設定されていて、勤務しながらも学べるのである。いろいろな職業の人、たくさんの国からの移民、まさに、多文化の街ニューヨークであった。

その教室に入って、まず驚いたのが、「どうしてそんなに英語が話せるのに、この教室にいるの？」であった。南米系の人、ヨーロッパ系の人、確かに母語の影響はあるものの自由に話せているのである。私も含めて日本からの人の会話力が弱いのを痛感した。しかし、彼らがどうしてこの教室に来ているかがわかったのである。ペーパーテストがあり、私たち日本人は、高得点である。ところが、自由に英語で話をしている人たちの得点が低いのである。

日本に帰国して、この外国人増加の事態は起こると考え、夜間の日本語指導者コースに通い、学んだ。その時、言語には、コミュニケーション言語と学習言語があることを学んだ。日本ではこのことが知られていなくて、多くの学校で、日本語が話せるのに、テストや学習ができないのは、能力が低いのではなど教師自身が誤った児童の自己イメージを伝えていたのである。

私は、この専門コースを修了していたが、この専門性を活かす場もなく、やっと10年後、地球子供教室の担当になり、このことは大いに役立てることができたのである。

ニューヨークの教室で、ある時先生が、「来週は生徒の皆さんが自分のテーマで発表してください」と話され、誰がいいですかということになった。なんと英語を自由に話しているブラジル出身の若い女の子が、UTO がいいと推薦するのである。他にも上手な人がたくさんいるのに、まいったなという感じだったが、引き受けることにした。今振り返ってみると、日本側からすると自由に話せる南米系の人、英語ができると思うのだが、南米系の人からみると文法や単語に詳しくペーパーテストで高得点を取る日本人が、英語ができるになるのかもしれない。

この時のプレゼンテーションの内容はよく覚えている。この教室に集まっている世

界各地からのメンバーを活かしながら、各国の文化の特性や世界の多様性を話そうとしたのである。

文化人類学の中でも、当時最先端の構造主義を提唱していたレヴィ=ストロースの理論で、「料理の三角形」というものがあり、この理論を応用しながら、世界の各地で営まれている料理の構造から文化の特性を導き出したのである。

これは、料理の材料と火の関係であり、一つは、「生」で火を通さない。二つ目は、「材料を直接火で焼いて料理する」、三つ目は「材料を水などで間接的に火を使って料理する」という三角形の構造図である。

この図を教室の前の黒板に書き、生で食べるサラダや刺身など、次に直接火で焼くステーキなどで、その材料が最後まで個性を主張するという料理。そして、煮物や鍋物など水で間接的に煮て、その中の材料がハーモニーを生み出すことなどを題材に、アメリカの個人主義と日本の集団主義的な文化について話したのである。すると、他のメンバーからもいろいろな料理が出てきて、この間に入るから、このような文化や民族なのだなど、大きな成果を得た。いつもは教室の中で、静かに後ろで聞くしかなかったが、この発表を機会に、たくさんの人々と交流が始まったのである。お昼になると大学の近くの様々なエスニック料理のお店に行き、いろいろと話し合うことができるようになったのである。

言葉の壁で、なかなか自分を出せないが、教師がきっかけを作り、教室の仲間と学び合うよさを体験させることが大事だと学んだ教室であった。この経験と同じような状況が日本の学級でもあり、外国から来た子を活かす取り組みから、学級全体の人間関係作りにつながったこともあった。

#### (4) 教室空間のデコレーションとオルタナティブスクール

アメリカには日本人学校は少なく、ほとんどの子どもたちが現地校に通っている。赴任した当時のニューヨーク日本学校は、小学校5年生から中学3年生にあたる9年生までの学校だった。そこで、現地校で、どのようなことを学び、どのような方法で学んできているのか知ることが重要であり、多くの現地校を訪問し、授業も参観した。

まずアメリカの小学校の教室に入ると、教室の掲示や飾りやコーナーなどがたくさんあり、そのデコレーションの多さには本当に驚く。日本の小学校も、中学校などに比べたら、掲示も多く、教室の飾りもあるが、アメリカの教室はその比ではない。天井からもいろいろとぶら下がってきていたり、いろいろなコーナーがあったり、多彩な教室空間が設定されている。

授業も、日本のように一斉に前の黒板の方を向いて、先生の話聞くスタイルではない。授業のやり方も、一斉ではなくグループごとに先生の所に来て学ぶやり方で、最初驚いてしまった。学校の建物も、体育館と講堂は別々にあり、食堂もあった。

先生方が、お昼の食事の指導をすることもなかった。勤務時間も、スクールバスで

子どもたちといっしょに帰宅する先生もあり、夜遅くまで残っているいろいろな準備をしている日本の教師と対照的であった。しかし、教室は日本の教室より、デコレーションも多く、なぜこのような差がつくのか不思議に思った。

ここにも、日本とアメリカの考え方や文化的な違いが現れていたのである。これは、スペシャリストとゼネラリストの違いであると思った。日本では、教師になった早い段階で、1年生から6年生までの学級担任をする方がよいと考えられている。一方、アメリカは、小学校2年生の担任はずっと2年生の担任を続け、2年生の専門家になるのである。

さらに、驚きと共に、大きな影響を受けたのが、オルタナティブスクールである。学校の中に別ルートの学校があるのである。特に、道德教育で有名なコールバーグの実験学校のジャストコミュニティは、日本での地球子供教室づくりにも大きなヒントと勇気を与えてくれた。

### 3. 学校から地域、サイバー空間へと連なる新たな学びの空間づくり

日本に帰国してからは、よりオリジナルな発想を持った教育実践を行うようになった。そこでは、目の前の子どもたちに視点を置き、ミクロな子どもたちの心理からマクロな地球社会の動向まで見据えながら、その空間という全体性を創出していく実践であったとも言える。

#### (1) 学級の中の第三の文化空間づくり

最初の取り組みが学級の改革からである。学校には、教師と子どもたち、子どもと子どもの2つの関係が主な学級の構造としてある。日本の学校には、勉強文化と運動文化があり、勉強のできる子、運動のできる子は学級の中でも目立つ存在になる。明治以来のこの状況に対して、様々な子どもの活躍の場を設け、一人ひとりの個性を認め活かすために、第三の学級文化が必要と考えた。そこで、担任として、映像の編集機などを購入し、教室に設置したのである。ここから、子どもたち自身で創るテレビドキュメント「阪神大震災と蒲田小学校」も生まれ、現在でも防災教育の映像になっているのである。この実践から、学びの空間づくりが本格化したとも言える。

#### (2) 学校の中のオルタナティブな学びの空間としての「地球子供教室」

学校の中にオルタナティブな学びの空間として創ったのが、1996年（平成8年）に、東京都大田区蒲田小学校にオープンした「地球子供教室」である。1990年代は、多様なアクターが国境を越えて移動し合うグローバル化の進展で、東京下町の工場の密集した地域である蒲田地区にも、多くの外国人家族が居住し、学校にも外国人児童が増加したのである。そこで、日本の子も外国から来た子もみんな地球の子であるとの考えのもと、「地球子供教室」を開設したのである。

日本語指導の教室であるが、日本語コードを遁滅した空間づくりを行った。また、人間関係作りについても、様々なしかけを空間の中に配置し、「一人でもいられる空間から共同の空間へ」を始めた。また、保護者との相談や指示の場面でも、その親の考えの背景になっている文化や慣習のこと、さらには、気候風土、経済状態のことなど総合的に判断しないと、本当に理解してもらわないまま、一方的に日本のやり方を押し付けてしまう場合もあるので、十分配慮した。

このように地球子供教室では、学校の中の小さな空間であったが、日本語指導と社会関係づくりの複眼的な視点から、テキスト型の学びからコンテキスト型の学びへと変革し、新たな学びの空間をつくっていった。この学びの変革が評価され、放送大学でも放映された。

地球子供教室でのコンテキスト型の学びを生み出すしかけが、狭い部屋の中に設置された様々な模型であり、古いパソコンであり、映像である。子どもたちが作った言葉カードも大きな役割を果たした。ここには、子どもたちを魅了する空間があり、外国の子どもだけではなく、日本の子どもたちも集まってきたのである。多文化共生の空間が生まれたのである。

### (3) 学校の中の学びの統合空間としての「地球子ども博物館」

この地球子供教室の発想を学校全体に広げたのが、学校の中の博物館づくりである。大田区から港区の三光小学校に異動し、子どもたちも学校の様子も大きく変わった。ある子どもの田舎での体験の一言からみんなの宝物を持ち寄り展示する活動が生まれ、学級の中の博物館、学年の博物館、そして学校の博物館へと発展したのである。ここでの宇宙・地球・世界・都市の4つのコーナーでの展示は、外務省の実験的取り組みにも認められ、この博物館にノートパソコンと有線ランが設置され、2000年初頭であったが世界とオンラインでつながったのである。

### (4) 学校の中のニュースクールとしての「梶山女学園アフタースクール」

2010年に梶山女学園大学附属小学校校長も兼務することになり、様々な改革や新校舎建設を行った。その中で、学園の事務から梶山ちはるさん、小学校から山下亜子先生、そして、校長の私の3人、そして、「放課後NPOアフタースクール」の平岩氏の助言も受け、放課後の子どもの生活を考えた「アフタースクール」構想を練った。近隣の学童保育や公立小学校のトワイライト、また、関東や関西で先行して実施している学校への訪問などを積極的に行い、梶小のアフタースクールとして、放課後の安全・安心な子どもの居場所づくり、社会で活躍する女性の就労支援、総合学園ならではの一貫教育を活かした取り組み、そして、60年の伝統を誇り、未来を志向する私立学校として、近隣の公立小トワイライトスクールや民間の学童保育所とは一線を画した上質で充実したプログラムを提供することにより、子どもたちのさらなる学びを深める機会をつくることを目的にしたアフタースクールづくりをめざしたのである。

しかし、実現するまでは、困難な壁も本当にいろいろとあった。一つは、経済的側面を重視する学園側の発想である。もし応募者が少なかったらという考えである。確かに、重要な視点である。ただ、この発想があまりに強いと新しいことはなかなかできないだろうな。もし応募者が少ないのではと考えるのであれば、応募者が来くなるようなもっと魅力的なプログラムや空間づくりをするという考えもあるのだけれどもと、個人的にはよく思った。この経済的側面からの発想と教育的な発想の違いを身をもって実感させられたのである。この二つの立場をよく理解し、事前に応募の可能性を探る調査や他の先行してやっている私立の小学校のケースを調べたりして、大いに尽力してくれたのが梶山ちはるさんであった。梶山さんは学園側の経済的論理よりも将来を見据えた発想と緻密さを持ち、このアフタースクール開設に大きな貢献をしてくれた。

そして、幸いなことに実際にオープンしてみるとたいへんな人気で、多くの応募者があり、現在も続いているのである。

この学校の中の新しい学びの空間づくりには、学校の教育課程で学んだ子どもたちが、その学びを活かしてさらに教科の枠を越えて学び合うというニュースクールの発想をもって実施したのである。ここにも、郷土の長崎やニューヨークでの体験、そして、エンゲストロームなどによる拡張的学習理論のバックボーンがあったのである。

#### (5) 地域の学びと地球の学びの空間をつなぐ「地球子ども広場 Global Kids Square」

第3の転換点となったのが、アフリカのブルキナファソとの出会いである。この取り組みをきっかけに、世界へと活動を展開していった。その経過は以下の通りである。

- ① 梶山女学園大学附属小学校が、ブルキナファソへ、2010年に机とイスを寄贈  
ル・クルーゼ学園小学校との交流が始まり、大陸を越えた水プロジェクト開始
- ② 2015年 日本・フランス・ブルキナファソの子どもたちによる合唱  
水の学び合いを通した3か国の合唱「I LOVE WATER」を梶山女学園大学で発表
- ③ 2016年 大陸間ミュージカル「I LOVE WATER～人と水の精の物語」を名古屋  
で上演  
ブルキナファソと日本の子でパリ協定の気候変動問題を加え上演、フランスも映像で出演
- ④ 2019年 パリ地球子ども広場（Global Kids Square in PARIS）公演を実施  
日本・フランス・ブルキナファソの子どもたちが、地球子ども広場（Global Kids Square）活動としてパリ公演を行い、世界の気候変動問題に対して「パリ子ども宣言」を行った。

世界との交流が広がるほど、自らの地域や日本のことを学ぶ必要があり、UR 団地で実施していたジオラマを使った SDGs 教育「西山っ子地球子ども広場」を開始した。

しかし、4年間の大学とURとの契約が終わり、ジオラマを半分に縮小して、椋山女学園大学内のEX棟207号室の部屋で、活動を開始した。そこには、椋山こども園の子どもたちの参加があり、学び合いを継続することができた。さらに、高学年用のジオラマ作成を行った。

しかし、2020年度はコロナ禍により、子どもたちが来られないという事態になったのである。

#### (6) オンライン上の学びの空間「スタディサブリ」と「ジオラマワンダールーム」

新型コロナの状況の中で、注目されているのがオンラインを使った学びである。実は、椋山女学園大学では、オンライン上で学べるリクルートマーケティングパートナーズ社（代表取締役社長山口文洋）のスタディサブリに注目して、2015年から宇土ゼミを中心に実験的に取り組んだのである。教職試験の対策と同時に、反転授業やケースメソッドのアクティブラーニングなどICTを使った授業力の向上もめざし実施していたのである。それは、導入の前に、山口氏と話す機会があり、単なる企業利益だけではなく、教育による格差是正などをめざしており、日本だけではなく、開発途上国も含め世界的に展開しようとしていることを聞き、個人の学びと集団としての大学の学びの中間地帯として、ピアサポートの場を活かした学習システムづくりをめざして導入することにしたのである。そして、現在まで継続して実施しており、今年度はコロナ禍の中で、大学にも来ることができず教職試験も不安視していた学生に対して、教職試験に合格した学生の体験談なども取り入れ、毎週、Zoom学習会を継続している。

このオンラインを使った学びは、山口氏の時代を見越した取り組みにより、今年のコロナ状況の中では、たいへんな成果を示しており、これからの一つの学びのあり方と言える。

このオンラインでのスタディサブリの学びは、大陸間水・気候変動教育プログラムにも応用された。フランスやブルキナファソとの大陸間プロジェクトでは、むしろ日本の現状をよく調べ、理解し、発表しなければならない。日本の水事情を世界に知らせるために、学生はショートストーリーの劇を創り、それをクロマキーの映像技術で、まるでその現場に行ったような映像を作ったのである。このショートストーリーの内容を創る学びのもとになったのがスタディサブリである。

そして、今年のコロナの状況により、ジオラマプロジェクトも更なる変革を求められたのである。

ジオラマは、ジオラマのある特定の場所に来なければ見たり、動かしたりできなかったが、現在、ジオラマワンダールームプロジェクトとして、水・気候変動問題、交通問題、街づくり、歴史的保存、自然災害対策、国際交流、租税教育などSDGs教育と関連させて、これらの事象に付与したQRコードを媒介に、世界との交流も含めた遠隔授業での探究活動を行うための学びのシステムの開発研究を行っている。これに

よって、このジオラマのある部屋に来なくても、ジオラマを使った学び合いができるのである。実験段階が終わり、動画撮影に耐えうようにジオラマのクオリティーを上げた低学年用と高学年用の2つのジオラマを制作している。これによって、幼稚園やこども園、小学校、大学の授業、さらに海外にまで配信できることになるのである。

## おわりに

コロナ禍の中で、人々の生活様式は大きく変わろうとしている。学びの世界は、オンラインによる方法で実施されるようになった。ただ、今の方法では、以前から教育改革の対象とされた知識伝達型の学習に戻ってきているように思われる。

この事態では、人々は直接出会うことはできず、オンライン上で教師の話や提示される映像を見聞きして、個人の中に知識を入れていく。せいぜいよくても、オンライン上に参加してグループ討議を行ったり、チャットなどで自分の意見を書き込んだりしながら、学習をしていくことになる。

これに対して、体験的な学びを行いつつ、人々がつながり合い、学び合う方法を見つけていくことは重要であると考え。そのとき、これまでやってきた方法を合わせたり、進化させたりといろいろな可能性が生じてきていると思う。

例えば、一人一人が具体的にジオラマのパートを作るとその作成過程において、他のパートを作った人との難しかった点や助言などしあいながら体験的な活動ができ、そのパートを映像化し、大きなジオラマにしていくのである。それでは、映像のゲームでやっているものでいいのではないかなとなるが、そもそもジオラマなど半具体物を作成するのは、子どもたちにとって映像だけの世界では、実際の社会の実像と映像の世界の区別がつかなくなり、リアリティを喪失してしまうので、子どもたちの発達段階では、実物と映像のバーチャルリアリティの間にハンズオンでき、操作できる具体物を介在させる役割もあるのである。

おそらく更なる ICT や映像技術の進歩があると思われるが、常に、郷土で体験した具体的なものとの触れ合いは自分の身近な世界で、家庭や地域で行いながら、それをサイバー空間など ICT の技術でつなぎながら、地域と地球社会を考え、行動していく学びの世界が求められると考える。その中での出会いでも、それぞれの文化や物事の進め方などの相違があり、その異文化接触に対するマナーづくりも求められると思われる。

自分の中では、第1の転換点である郷土から東京への移動も、第2の転換点ニューヨークの生活も、第3の転換点アフリカとの出会いも、最初は未知なるものへの対応であった。今回の新型コロナ（COVID-19）は、個人史を越える人類全体への転換点となるであろうと思う。

どのような事態になったとしても、人類の根源的な問いと人類が築いてきた歴史的叡智を忘れずに、新たな学びの世界が開かれていくことを願いたい。